

表現者を育てる授業

2023. 9. 27

好きではなかった中学時代の国語の授業

もともと国語の教員になるつもりはありませんでした。中学校の国語の授業は、私にとってはつまらなく、退屈なものでした。こういって、随分と生意気な中学生だと思われるかもしれません。実際、そういった面があったことは否定できません。

国語の授業は好きになれませんでした。しかし、国語の成績はというと、わるくはありませんでした。その一方で、本を読むのは嫌いではありませんでした。小学5年生のときに、一冊の本に出会いました。『巖窟王（モンテ・クリスト伯）』です。本屋さんで母親に買ってもらい、自分の部屋で一気に読みました。夢中で読みました。知らず知らずのうちに作品の世界に引き込まれていました。そこからです。私の読書人生が始まりました。

国語から逃げる自分

高校に進み、大学受験の時期を迎えました。「さて、どうしようか」と考えました。漠然と教職の道が浮かんできました。そこには、中学時代の恩師の影響がありました。その先生は、社会科の先生でした。授業がおもしろく、社会科が大好きになりました。

ところが、人生とはわからないものです。いろいろな経緯があり、社会ではなく国語の教員免許を取得することになりました。そして、小学校の教員になりました。免許が国語なので、専門教科は国語と言いたいところですが、正直、国語から逃げていた自分がいました。小学校に3年間勤務しましたが、国語からは逃げっぱなしでした。

ようやく国語と正面から向き合う

そんな私が、何の因果か、中学校に勤務することになりました。免許が国語なので、国語科担当の教員としてです。逃げ場を失いました。追い詰められました。こうなると、立ち向かうしかありません。

そこで、考えました。浮かんできたのは、中学時代の国語の授業です。私が好きにはなれなかった授業です。「自分が中学の国語の授業をやる以上は、つまらない退屈な授業をしないようにしよう」と心に決めました。

ところが、自分がその立場になり、初めてわかったことがあります。「中学の国語の授業は、そんなに簡単なものではない」そのむずかしさを思い知らされました。一方で、困難さはある反面、いろいろな可能性もあることに気づきました。授業者の裁量や力量に任されている部分が多いと感じたのです。これは工夫次第だと考えました。

(次号に続く)